

月例会ダイジェスト【118】

4月の月例会は、2022年にWHOがツールキット「A toolkit on how to implement social prescribing」を公表したことを契機に国際的な広がりを見せている「社会的処方 (Social Prescribing)」について理解を深め、その実践可能性を探る場となった。コーディネーターは、植月三咲子氏 (ジョンソン・エンド・ジョンソン日本法人グループ)、甲斐裕子氏 (公財・明治安田厚生事業体力医学研究所)、金森悟氏 (帝京大学大学院)、日比野浩之氏 (順天堂大学)、福田洋氏 (順天堂大学) の5名が務めた。

最初に、甲斐氏は健康の社会的決定要因 (Social Determinants of Health : SDH) の視点をふまえ、患者を地域の非医療サービスにつなぐことで健康やQOLの回復を図る「社会的処方」の基本的概念を説明した。社会的処方は英国で発祥し、現在は制度化され、リンクワーカーを介して非医療サービスへとつなぐことで行動変容の促進、医療費の削減、孤独感の改善といった効果が示されている。日本においても、厚生労働省が令和3～5年度にかけて9府県でモデル事業を実施した。本事業は、かかりつけ医と医療保険者 (自治体) が協働し、加入者への保健指導や地域資源の紹介を行うものである。リンクワーカーは保健師、管理栄養士、ケアマネジャー、生活支援コーディネーターなど多職種が担ったが、人員の制約から社会資源の紹介や実際の利用実績は限定的にとどまった。また、支援対象の多くがメンタルヘルス、貧困、高齢などのハイリスク者であったため、高度な専門性が求められたほか、地域資源の把握の難しさなど複数の課題が浮き彫りになったと述べた。

さらに日本各地の自治体による施策を紹介した。兵庫県養父市における住民参加型のリンクワーカー育成や地域資源を集約したポータルサイトの運営、川崎市でのオンラインコミュニティ運営に加え、書籍『みんなの社会的処方』の出版や「社会的処方EXPO」といった大規模イベントの開催などが挙げられた。また、静岡市では社会的処方の意義を事前に共有したうえで、医院の中庭に地域店舗が来店するマルシェ型イベントを実施し、住民とのつながりの構築を図った事例が紹介された。横浜市では、自治体が地域資源情報を民間企業の保険外交員に提供し、その職員がリンクワーカーとして訪問時に住民ニーズに応じた情報提供を行う官民連携のアウトリーチ型施策が展開されており、多様な実践例が示された。

このように、社会的処方は医療機関を起点とするハイリスクアプローチから一般住民を対象にした活動に広がりがつつあり、産業保健と連携することで、労働者を対象とした活用があると述べた。

続いて登壇した植月氏は、産業医としての実務および産業医科大学大学院生としての社会的処方を研究する立場から「社会的処方を産業保健につなげる意義」を論じた。企業での労働者との個別面談の場では、健康問題の背景に子育てや介護、経済的困難などの生活課題が潜んでいる場合があると指摘した。傾聴のみで改善に至る場合もある一方、専門的な支援が必要となるケースも一定数存在し、こうした課題が放置されると、心身悪化やパフォーマンス低下、休職・離職につながる可能性があるという。産業保健職が早期に課題を把握・整理し、社会資源につなぐことは未病段階での予防に有効であるとした。しかし、社会的処方は主に医療や行政を中心に展開されており、労働者には十分に届いていないのが現状である。そのため国は孤立・孤独対策の一環として、産業保健領域における社会的処方の推進を提唱している。日常的かつ継続的に多くの労働者と関わり、医療知識と面談スキルを併せ持つ産業保健職は「企業版の家庭医」とも言える存在であり、社会的処方と親和性が高いと述べた。労働者の困りごとを多層的にアセスメントするには、働き方や生活状況、社会的支援なども確認するなど、SDHの視点もふまえることの重要性が指摘された。一方で、社会資源に関する情報不足、フォローアップの困難さ、時間的・制度的制約といった産業保健職が実践するうえでの課題も明らかになった。現在、植月氏は「産業保健職はすでに社会的処方を実践している可能性がある」という仮説のもと研究を進めており、今後は社会的処方の実践に必要な要素や、障壁、労働者への効果といった点について検討していく意向を示した。

会の後半では「日常業務の中の社会的処方」をテーマにグループワークが行われ、がんの両立支援や、子育てによる孤立感を抱える従業員に育児サークルを紹介した事例などが共有された。一方、従業員本人に加え家族への支援をどこまで産業保健の業務範囲とするかについては、産業保健職の間でも意見が分かれた。また、支援につなげる工夫として、紹介先の事前確認や初回参加時の同行の重要性が挙げられ、社会的処方と産業保健の親和性や今後の実践・研究への期待が示された。

さんぽ会の詳細は下記サイトをご覧ください。

- ホームページ <https://sanpokai.net>
- FB ページ <http://www.facebook.com/sanpokai>